

バルトン没後一〇〇年記念シンポジウム

特別報告 スコットランドとバルトン

日本スコットランド協会理事

稲永 丈夫

本日は、一〇〇年に一度の記念すべき歴史的な集いに、私の調査報告の為にわざわざ貴重な時間を割いていただき恐縮に存じます。調査といいますが、私はこの種の方面での全くの素人であります上に、実は、偶々ゴルフの全英オープンにボランティアで参加する予定があり、その機会を捉えて、五日程日程を繰り延べて調査に当てました為に、訪問先三カ所をわずか一週間足らずでドライブするという、時間的にも大変制約のある強行軍となりましたので、これからの私のレポートが、果たして皆様のご期待に沿い得ますものかどうか、誠に心もとない限りでございます。もし退屈されるような場合は、涼しい会場でもあり、遠慮無く昼寝を楽しんで下さい。

私が、バルトンさんのスコットランドにお

ける親族探しに参加させて頂きましたのは、昨年秋十月のことでしたが、稲場さんからご案内頂きました時、正直のところバルトンの名前を聞くのは初めてでした。その後、稲場さんからたくさんの資料を頂いて読み、自分でも調べて行きますうちに、病膏肓に入ってしまった。それを決定づけたのは、今回の調査だったことは間違いありません。今度の調査旅行で訪問した地方は、私の大好きなスコットランドの中でも、最も溪谷美の美しいところで、なだらかな山並み、蛇行する清流、山肌にジュウタンを敷き詰める紅紫のヘザーの花々が織りなす風情は、誠に筆舌につくし難いものがありました。しかも、行く先々でその美しい自然の申し子ともいふべき、素朴で親切なスコッツ（スコットランド人）と

数多く出合い、しかも調査の目指すバートンさんの家系がその良きスコッツの典型とも言ふべき方々であることを発見したことは、実に生涯忘れ難い、さわやかな印象を心に刻みました。この旅を通して、スコットランドが益々近くなり、超大好きになったことは申すまでもありません。この意味で、今回このよゆうなスコットランド行きに駆り立てて下さいました鳥海幸子さん、稲場さんご夫妻、そしてバートンさんの墓前に心からお礼を申し上げます。さて、今回の調査のポイントは、三つあります。

(1) 最大の眼目は、何といつても、「ジン・クリステイ」さんに会うこと。この方は、去る五月十日付エディンバラ・イヴニング・ニュースに掲載された鳥海さんの記事に、これまでただ一人反応してくださった人で、遠くウイリアム・バートンさんの母方の筋に連なることでありました。従って、事前に鳥海さんからもご挨拶のお便りを差し上げ、私も電話連絡するなどの手を打って、エディ

ンバラ到着早々真つ先にお会いいたしました。(2) 次のポイントは、バートンさんの出自、家柄について、もう少し詳細を知りたい、これが今後の調査の方向性を決める大きな要素でもあり、またバートンさんが、没後一〇〇年の今日に至るまで、この道の師と仰がれ、敬愛される所以を探る意味でも、バートンさんの育った家庭とか、時代背景はどんなものだったのか、この辺をもう少し探り出したいと思つたのです。

(3) 最後に、昨秋以降、本件で大変お世話になつたスコットランドの方々に出来るだけお会いして、協力への謝意を伝えること、そして今後の調査の方向性を相談することでした。

では、第一のポイントからご報告します。

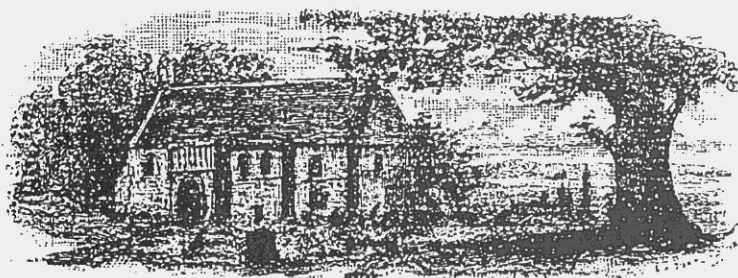
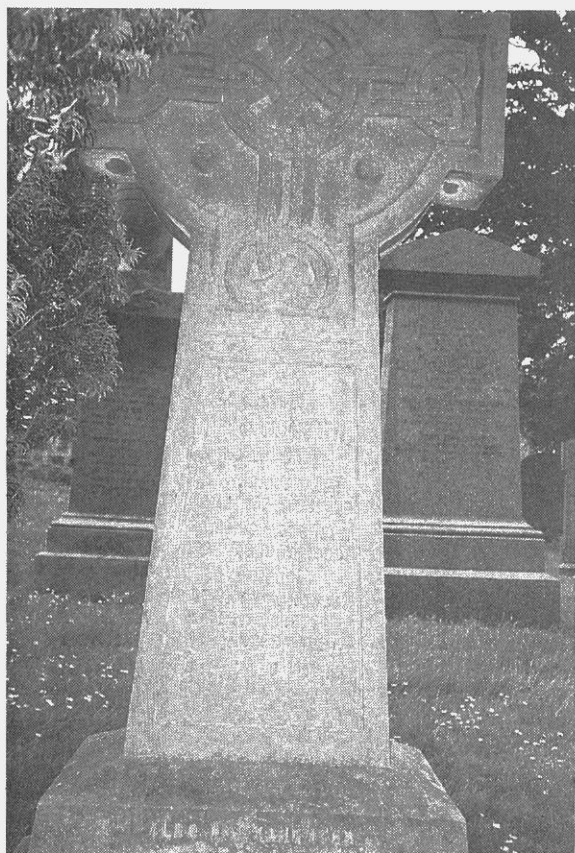
ジンさん、七三才。もの静かな、控えめな方。自分の系図、家系に関する関心は、一般的にスコットランドの人がそうであるように、以前から強くお持ちだったようで、これまでに故郷のエルギンを訪ねて調査、資料収

集をされたこともあるほどで、その行動力、探求心は七三才の老人とはとても思えませんが、ご主人アダムさんは、エディンバラ公文書館を定年まで勤め上げ、今七八才とのことでしたが、背筋もピンとして、かくしゃくとしておられ、奥さんの調査を手伝ったり、庭いじりや週一度のシヨップイングの他、ゴルフにも大部精を出しておられるようで、暫し私ともゴルフ談義に花を咲かせました。ご夫妻には、一人息子のイネス君（弁護士）がおられ、既に独立して一家を構え、その孫二人と週末遊ぶのが、お二人の大きな喜びとのことでした。

ジンさんに依ると、祖母が、ウィリアム・バートンの母上キヤサリン・イネスの兄弟の一人、ジェームスの子供だったが、正嫡の子ではなかったのが、正規の記録が残っていない由。ただ思いがけずも、鳥海さんの記事を新聞で読んだ時は、意外なストーリーに本当に驚き、何とか鳥海さんに協力したくて新聞社に連絡したと。もちろん、新聞社には、上述の次第も打ち明け、正式には、名乗り出す資格はないが、これまで集めた資料や情報を

提供したいと申し出たとのことでした。ジンさんは、コスモ・イネスの墓石をエディンバラのウオーリストン墓地に「発見」、その写真を撮ってくれていました。この墓地は、広大な敷地で、何千本という墓石が立ち並び、しかも多くが苔むして碑文も読みづらく、その上草木が鬱蒼としており、ジン夫妻も探し疲れて、帰りがけたところ、ふと道端の小さな墓石に微かにコスモ・イネスの名前が目に入ったとかで、全く偶然の発見だった由。この墓地には、後日私も、アダムに案内して貰いましたが、なるほど大変な広さで、端から順番に探して行ったら、優に一日仕事になるのももちろん、問題の墓石が高さが一メートル少々で、周りのものに比較しても、実に小さいのです。コスモ・イネスほどの有名な著名人にしては、質素で飾り気のないものでした。

他日ジョン・ヒル・バートンの墓石探しを一人でやりましたが、これもエディンバラ郊外のダルメニー教会の裏庭にひっそり、小さく立っていました。もつとも、ここはジョン・



ジョン・ヒル・バートンと娘ローズの墓石／ダルメニー教会

ヒルと生後まもなく亡くなった娘ローズ二人だけのもので、バートン家の墓碑は、市内のデイン墓地にあるようですが（ここも私一人で歩き回りましたが、遂に見つかりませんでした）、管理人がいるとのことで、訪ねましたが留守で、結局ジーン夫妻に後事を託さざるを得ませんでした、それにしても、イネス家同様、御影石の小さな墓石でした。両家の家柄、人柄が反映されているように思いました。ジーンさんは、スコットランド公文書館や写真博物館にも案内してくれました。公文書館では、生まれて初めてパソコンの前に座り、係員から、何度も何度も操作の手ほどきを受けながら、イネス、バートン両家の関係者の出生、結婚、死亡記録データを検索してくれました。七三才のおばあさんが生まれて初めてパソコンと苦闘している姿を想像して見て下さい。私は、ちょうどその時右手の小指がひどい炎症を起して、右手が殆ど使えない状態でしたので、なおさらジーンさんには負担を掛けたようで、今でも申し訳無く思っています。しかし、ここでは特に目新しい情

報は得られませんでした。ただ、父上のジョン・ヒル・バートンに、デーヴィッドとメリーの弟妹の居ることが判明したのが、私には発見でした。

写真博物館の方も、ウィリアム・バートンが当時日本から書き送ったような資料は見当たりませんでした。ついにながら、これら写真関連資料は、ロンドンの国立図書館、ブラッドフォードの国立写真・映画博物館、バースの王立写真協会あたりにしか無い模様ですが、今回は残念ながらそれらを訪問する時間はありませんでした。その他、ジーンさんが私の訪問に備えて、自ら足を運び写真に撮ってくれたのが、コスモ・イネス一家が住んで居たインヴァリース・ハウス（今は薬草研究で世界でも有名な王立ボタニカルガーデンに買い取られ、その一部になっている）、それにジョン・ヒル・バートン一家、即ち幼少時のウィリアムも含めて、家族全員が愛着を持って十七年も住んだクレイグ・ハウスと晩年の住まいモートンハウス等でした。

それに、先週届いたジーンからの便りでは、



インヴァリース・ハウスとボタニカルガーデン



クレイグ・ハウス



モートン・ハウス

クレイグ・ハウスに長逗留したアフリカ旅行探検家のキャプテン・スピークがウイリアム少年の「*wee*」を書いた「Yellow-haired wee Willie Burton」(金髪のウイリー坊や)なる本があることが判った由、ジーンは早速その本をあちこちの書店、古本屋で探したがまだ見つからない、見つけ次第送るとありました。キャプテン・スピークのことは、キャサリン・バートンの書いたメモアの中でも、懐かしく回想されている人物ですが、クレイグ・ハウスに滞在中、バートン一家と親交を深めた様で、特にウイリー少年との消息は、本に書き留めるほどに印象深かったのでありましょう。表題の「*wee*」というスコットランド語の一語に、ウイリー少年への愛着や懐かしさがにじみ出ています。この本が見つかったと、ウイリアム・バートンの幼少年時代がかなり浮かび上がって来るかも知れませんが、ジーンさんについては、最後に、鳥海幸子さんに是非スコットランドへいらしてくださいとのメッセージがあったことをお伝えしておきたいと思えます。

次に、調査の第二のポイントに関連したエルギンとアバディーン訪問について申し上げます。

まず、エルギンでは、ジーンさんから示唆された公立図書館、エルギン大聖堂、イネス・ハウスを訪問しました。前二カ所は、市内のほぼ中央部にあるクーパー公園の中、一方イネス・ハウスは十キロメートルの郊外にあります。訪問の当日は、スコットランドでは珍しく、二八℃の猛暑となり、公園は、日光浴を楽しむ人々で賑わっていました。

従って、図書館はがら空き、お陰で私が司書4人を独占する形となりました。私の説明を受けた後、4人はコスモ・イネスに関する記録や資料をパソコンで片っ端から調べてくれました。この結果、イネス一族(克蘭)が、モレイ地方の豪族で、先祖は一一五七年にまで遡ることや、コスモ・イネスの家族構成がほぼ判明したのですが、中でも「*Memoir of Cosmo Innes*」なる小冊子に出会ったのが一番の収穫でした。これは全文八三ページ、一八七四年エディンバラで出版と

しか記載無く、著者が明記されていません。

ところが、誰かが手書きで著者名のところに、Mrs. J. H. Burton、即ち、コスモ・イネスの長女でジョン・ヒル・バートンと結婚した人、ウイリアム・バートンの母上と記してあるのです。この手書きについては、この本のコピーを受け取った際、気付いてその場で確認しておけば良かったのですが、気付いたのがエルギンを去った後で、後の祭、今図書館の方へ確認中です。ただ、内容的に見て、本当の身内しか知らないようなこと、コスモ・イネスの精神の内奥を記した箇所がかなりあること、それに文体からもキャサリン・バートンさんの著作と見て間違いないように思われます。

では、コスモ・イネスはどんな人だったのか。「著者はその著作によって知られる」とよく言われますが、彼のように、専門が古物研究や系統学の大家であり、著作もその方面のものが殆どで、自らのことは全くと言ってよいほど書き記さなかったもので、その著作は余り著者を語ってくれません。それだけに、こ

のメモアの資料的価値は高いと思われれます。

メモアに依りますと、

① 弁護士ジョン・イネスとエウフェミア・ラッセル夫妻の十六人の子息の内、十五番目（ゴルフでいうブービー）で男子としては一番下、末っ子の妹エリザベスと共に、七〇才以上の長寿を全うした。

② 幼少の頃は、繊細で病弱だったが、成長とともに、頑健になり、体質的に睡眠時間は短くて充分。

③ 学問が無性に好きで、特に系統、系図に異常な関心を持ち、古記録、古文書の解読では彼の右に出る人は居なかったと言われている。

④ 同時に、大の旅行好きで、後に長女を嫁がせるジョン・ヒル・バートンともよく山谷を跋渉した。それに、スポーツは、同時代のスコットランド人の通弊で、なんでも好きだったが、自らは狩猟をたしなみ、雷鳥打ちを得意とした。また、馬が大好きで、よく乗馬に出かけた。（ジョン・ヒル・バートンは馬など動物は大好きだったが、馬に鞭を当てるのは

残酷だと、あまり馬には乗らなかつた由）学問と趣味を両立させたバランスの取れた人。

⑤ 語学の才があり、仏語、イタリア語、特にギリシヤ語は達人。ギリシヤの都市コルフの判事へ招聘されたが、断わつた。エディンバラのラムゼイ邸に氣を許した友人を招いてギリシヤ演劇を読むのが楽しみだつたという。

⑥ 生粋のジェントルマン（社会で俗にジェントルマンと呼ばれる類の人々では無く、ごく自然に、無意識的に、特に努力しなくても、本来的なジェントルマン）で、非ジェントルマンとは、一緒に暮らすとか、家庭のプライベートを打ち明けるとか、食卓を共にすることは無かつた。

⑦ 家庭を特に大事にし、心根の実に優しい人。彼が任命された仕事で、一番愛着を持つた、故郷のモーレイ郡長官（一八四〇年）の時、アイルランドの大飢饉（一八四五〜四九）に端を発した暴動が郡内に発生。地域の穀類が大量にアイルランドへ輸出されるのを見た群衆が、飢饉がモーレイにも押し寄せるとパニ

ックに陥り、暴力で港の封鎖をして輸出を阻止しようとしたが、イネス長官は、自ら暴民の説得に努め、軍隊の出勤を極力押さえて流血を回避しようと図つた。民衆の抵抗が下火になると、牢獄に繋がれた人々を見舞い、その家族には金銭を与えたり、子供の名付け親になつてやつたりし、法廷で厳しい判決が下りた際など、人目もはばからず、涙やすすり泣きをもらして同情したという。

エルギン大聖堂：入り口の部分が幾分残っているが、殆ど廃墟。にも拘わらず、一部修復工事をやっていました。ジンさんが、ここでコスモ・イネスの夫人イサベラ・ローズの墓石を見た記憶があるというので、廃墟の周りにある墓地を探したが、見つからず、切符売の青年に調べて貰うと、墓石一覧表には、確かにイサベラ・ローズの名前がありましたので、再度青年と一緒に探したが、遂に見つからず。もっとも先の図書館で、エルギンにある墓石のデータベースを調査したところでは、イサベラ・ローズ夫人の墓は同地には無いことになっていましたので、大聖堂の一覧

表にある方は、同姓同名の異人でしうか。現に、イサベラ・ローズ夫人の墓は家族と共に、エディンバラにありました。

イネス・ハウス：エルギンの東方約十キロメートルの広大な敷地に立つオランダ風の館ゲートをくぐつても、林や湿地、牧場が延々と続く。裏手の門のところで、座布団と本を一冊小脇に抱えた、これから日光浴に出かけるといふ上品な老婦人と出会う。訪問の訳を説明すると、何と自分もイネス家のものといふ。実は、主人がロバート・イネスといふ、現在カナダのオンタリオに住んでいるが、今夏休みでここに遊びに来、恒例ながらイネス・ハウスに滞在している。彼女によると、一八三〇年代に同族のものが、かなりアメリカ大陸に渡つた由。今主人は部屋で昼寝中とのこと、また彼女の日光浴の時間をこれ以上奪つても悪いと思ひ、名刺を渡し、先方の住所を教えて貰ひ、後日いろいろ質問状を差し上げるかもしれないから、その節はよろしくとお願ひして、お暇した次第。

ところが先週のこと、そのロバート・イネ

ス夫妻より、突然来信あり、「その後、エディンバラに出て、クイーンズフェリー家族の歴史研究会の人と会つた。同研究会では、今自分の曾・曾祖父のキャンベル・イネスと曾祖父アレクサンダー・イネスのことを調査しているが、その資料の中で、コスモ・イネスの名前に出くわした。

どうも、コスモ・イネスと曾祖父のアレクサンダー・イネスは同じ年、同じ教区に属していたようだ。ひよつとして、二人は従兄弟ではなかつたかと思われ、今調査している。何か判明すれば、教えましょう。ついでには、コスモ・イネスが日本とどんな関係があつたのか、大変興味有り、教えて欲しい」との丁寧な、しかも驚くような文面でした。すぐに、返事を出しておきました。が、今やバートンの輪は、スコットランド・日本・カナダへと徐々に広がりを見せて来ました。面白いですね。

最後にアバディーン図書館での調査：ご存じの通り、当地はジョン・ヒル・バートンの生地なので、バートン関連の事項に焦点をし

ぼったことはいうまでもありません。先ず、宿で、「アバディーン並びスコットランド東北地方家族の歴史研究会」なる民間団体のあることを知り、訪ねてバートン家やイネス家の資料、記録がないかチェックしましたが、特にこれといったものは見当たりませんでした。先ほどのロバート・イネスの手紙に有りましたクイーンズフェリー家族の歴史研究会といい、このような研究会が各地にあるようです。

そこで、公立図書館へ参り、ジョン・ヒル・バートン関連の資料の有無を尋ねますと、最初は無愛想でとつき難い受付けのおばさんでしたが、色々資料の検索を進めるうちに、自分でも興味を持ち出したのか、私の机の上に、次々と資料を運んでくれるようになりました。

エルギン図書館で見た「コスモ・イネスのメモア」、スコットランド弁護士名鑑、当地の新聞アバディーン・ジャーナルやアバディーン・フリー・プレスに掲載されたドクター・ヒル・バートンの死亡告知記事（一八八一・

八・二一付）、バートン博士の名著の一つ「ザ・ブックハンター（一八八二年版）」等でしたが、特に最後の「ブックハンター」をペラペラめくって見ると、最初の部分にキャサリン夫人の「ジョン・ヒル・バートンのメモア」が載っておりました。少し読みすすむだけで、最愛の夫を二か月前に亡くして、まだ心の傷がうずくのをじっと抑えて書き綴ったよう、夫への愛情と尊敬がにじみ出ています。明快で達意の文章も印象的です。その上、母親や妻、子供達に当てた手紙がふんだんに挿入されていて、彼の人柄、思想、心理状態等を知るには、これ以上の資料は無いように思われます。

このメモアに描かれたジョン・ヒル・バートン像を少し追って見ましょう。

①まず、母親エリザベス・バートンの強くたくましい、勇ましい女性像が描かれています。格式ある富裕な領主の娘に生まれたエリザベスが、しがたない一兵卒のウィリアム・キニモンドと結婚した為に、実家の祝福どころか、むしろ邪険な仕打ちを受けながら、貧困に耐

え、子供の教育に心を配り、特にジョンの才能と素質に絶対の信頼を置き、老後の為に買備えた家さえ売り払ってその学資を工面した由。ジョンも、この母親の愛情と犠牲を決して忘れることなく、その期待に応えようと学業に励んだ。このジョンの母親思いという点は、コスモ・イネスにも共通して見られる。

②無類の動物好きで、その生き様を観察するのを楽しんだ。その動物への優しさは、過剰だったとキャサリン夫人は記しているが、例えば、馬自体は大好きなのだが、馬に鞭を当てたり、負担をかけたからといって、馬に乗ろうとはしなかった由。この点コスモ・イネスとはやや違うようです。

③従って、一番の趣味ともいえる、長距離旅行も、馬には乗らず、徒歩旅行でした。汽車が開通してからは、距離を稼ぐ為、たまには汽車に乗ったそうである。休暇になると、母からせいぜい一ポンド程度の小遣いをもらい、二ペンスのオートミールをかじりながら、小遣いが無くなるまで、信じられないほどの距

離（一日五〇とか六〇マイル）を歩いた。この徒歩旅行には、一人か、息子達、或いは親しい友人と連れだつて出かけた由。

従つて、ウイリー少年もよく父親に連れられたようで、この頃の習癖が後年、日本や台湾で生かされることになったのではないでしょう。また、コスモ・イネスも無二の親友として、常連の同伴者だったようです。特に、ジョンが最初の夫人を亡くし失意のどん底にあった時、その心の痛手を癒したのは、仕事に没頭することと、コスモ・イネスとの長い散歩だったとのことで、よく二人で散歩しては、イネスの家に立ち寄つて、夕食の馳走にあずかり、そのお札にユーモアと話題に富んだ楽しい話しをして帰つたそうです。そこでややはにかみながら、静かに聞きほれていたのが、後にジョンの奥さんとなるキャサリンだったという次第です。ここで面白いのは、キャサリン夫人が、夫のことを、「彼は good talker だが、bad listener だった」と評している点です。恐らく彼の話しが面白くて、皆よく笑つたので、ジョンは益々勢いづいてし

やべりまくったというところでしょうか。

④ジョン・ヒル・バートンに、「Political & Social Economy: Its Practical Application」の著書があることはご存知でしょう。この本を、後年福沢諭吉が翻訳して「西洋事情外篇」として世に出した「Political Economy」の原本と目されるものですが、この本について次のようなエピソードが紹介されています。すなわち、夫人は、ジョン・ヒル・バートンの数多い著作の中で、この本がベストと評価しているのですが、当初二冊本として発行され、先ず一巻目を、著者も知らずに読み出したところ、その理論に圧倒されて、一気に読み終え、どうしても二巻目が読みたくて、なければの小遣いを全部はたいて手にいれ、読みふけた。結婚後、そのことをジョンに話したところ、ジョン自身は他人がそんなに評価してくれているとは思ってもよらなかったようで、自分では余り評価していなかったようだ、と記しています。これが、やがて日本近代化の火付け役となるのは、著者のジョンは更々予想していなかった訳です。

⑤ジョンは、心根の非常に優しい、親切心に溢れた人で、他人の苦しみや悲しみにすぐに反応した。特に晩年は、小児、貧者、小動物を喜ばせることに最も生き甲斐を覚えた。金銭には非常に淡泊で、気前よかった。かつての学友達の面倒もよく見、金に窮しておれば、大体いつも、乞われた額の倍を工面してやった。

このように見てきますと、コスモ・イネスとジョン・ヒル・バートンに多くの共通項があることが判ります。二人とも、専門分野では、実にハードワーカーだが、書齋の虫といったような偏向は無く、心の優しい、親切心、同情心に富み、家庭を大切にし、動物を愛し、歩くことが好きだった。二人が無二の親友だったのもけだし当然と言えましょうが、これらの特性は、優れてスコットランドの伝統と言っても差し支えないようです。よく働き、よく遊ぶ、このタイプのスコットランド人は、今でもよく見かけます。私共日本人は、ともすると働くことには長けていても、本当の意味で遊ぶことは余り得意では無いようです。

この意味でも、スコットランドに学ぶ点はあるようですね。

今回の調査結果を踏まえて、今後スコットランド側での取組み方についてですが、ウィリアム・バートンさんの兄弟関係では、タッキーとコスモ・イネスが詳らかになっていません。従って、これら兄弟の親族が残っている可能性は否定できませんので、引き続き調査を進めたいと思います。

ウィリアム・バートンさんの父方、即ちジョン・ヒル・バートンについては、弟ジェームスの線が未調査です。

それから、母方のキャサリンの筋では、ジェームスとコスモの2兄弟とマーガレットとメアリーの妹二人が判然としていません。

これら未調査のポイントは一つ宛調査でつぶして行こうと思っておりますが、皆様方でも、何か情報が入りましたらお知らせ頂きとうございます。

それに、現地を歩いてみて、やはり母親のキャサリンさんのイネス家は今でも相当の末裔がおられるような心証を受けましたので、

本拠地モーレイ地方の新聞二誌に、エディンバラ・イヴニング・ニュースと同じ様な記事を載せて貰うよう働きかけようと思います。そして、ジョン・ヒル・バートンの生地、アバディーンについても、その地方紙が実際記事を掲載してくれたのかどうか、現在確認中で、これがまだなら掲載をお願いする予定です。

それから、先ほどご紹介しましたオントリオのロバート・イネスさんの手紙にありました「クイーンズフェリー家族の歴史研究会」といった、イネス系図に興味をもち研究している団体（ほとんどイネスの末裔達と思われる）との連携を図りたいとも考えています。ひよっとすると、地球的な繋がりのあるネットワークができ上がるかも知れません。或いは、スコットランドの、イネス家の様な氏族クランの結束は今でも強固なものがあり、マクドナルドの一族が世界各地から定期的にスコットランドに集まる例があるように、イネス一族にもそういう会合や連絡が既にでき上がっているかもしれませんね。

またいつか、皆様にグッドニュースをお伝えできる日の来ることを大いに期待しております。ご清聴有難うございました。

